

2009秋季講演会報告

東大LOC実行委員長 永原 裕子

2009年9月28日から30日にかけて、東京大学本郷キャンパスで秋季講演会が行われました。例年通り、学生、院生、研究員等の若い参加者が多く、活気にあふれたものでした。期間中、大きな混乱や問題もなく、講演会を終えることができました。参加者のみなさまのご協力ありがとうございました。

インフルエンザの流行がどのようになるかの見通しが立たなかったこと、8月末に事前参加を締め切った時点での登録者数が少なかったことから、予定通りに開催ができるかどうかをやや心配いたしました。さいわいインフルエンザもそれほど蔓延せず、当日参加者が多く（LOCメンバーも何人か含む）、最終的には190名の方にご参加いただき、成功裡に開催することができました。東京開催ということで、東京人口の多いことがこの事前登録の少なさの一因であったようです。

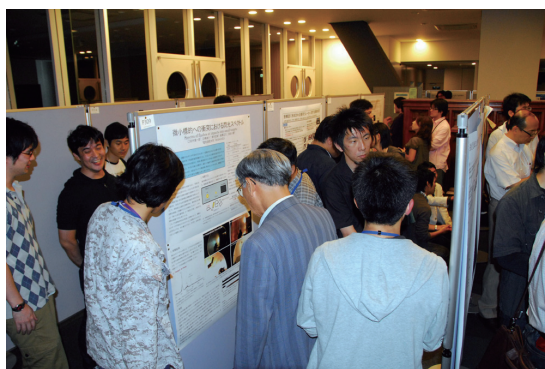
発表者数は、一般公演114件（口頭75件、ポスター39件）、最優秀発表賞エントリー講演5件、最優秀研究者賞特別講演2件で、総講演数は121件でした。今年は、なるべく多くの方に口頭発表していただくという趣旨で、口頭・ポスターどちらでもよいという発表希望

の方にも、積極的に口頭発表に回っていただきました。そのため、一般講演時間が質疑込みで11分と（例年通り？）短くせざるをえませんでした。これには、“十分に内容を話すことができない”というご不満や、“どうせ毎年こんなんでしょ…”という諦めの声も聞かれましたが、反面、“コンパクトに色々な話を聞けてよい”というご意見もありました。

ポスターに関しては、今回は会期の間を通して掲示しておくことができました。ただし、ポスター会場に予定していた場所の都合で、初日終了後に急きょポスター会場を変更せざるをえませんでした。ポスター発表の方々には、大変ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ありませんでした。そのようなハプニングはありましたが、ポスター会場が講演会場に近いことと、学会期間を通じてポスターを貼っておけることはたいへん有意義であったと思います。条件が許すなら、今後の年会においてもぜひ踏襲していただければと思います。



東京大学工学部2号館でおこなわれた、秋季講演会会場風景



講演会場の脇で展示されているポスターを囲み展開された活発な議論

今年の講演会の特徴としては、昨年に引き続き、「かぐや」の観測データに関連した、月の科学に関する発表が多かったことがあげられます。昨年の第1次報告的な内容を踏まえ、それをさらに発展させた解釈・議

論が多く、大変実りある発表が見られました。このような惑星地質学というべき表層地形の観測・解析に関する発表が多かった反面、惑星系起源や惑星内部進化、大気表層環境の安定性といった、太陽系惑星の起源・進化を大きな視点で見る研究はあまり多くありませんでした。今後期待される系外惑星におけるハビタビリティの理解、計画が進みつつある始原天体からのサンプルリターンというようなことを考えると、そのような分野もぜひまた活発に進展してほしいところです。

最優秀発表賞のセッションでは、今年も非常に素晴らしい内容とプレゼンテーションを聞くことができました。ただし残念なことに、応募者数が5名と過去最低でした。最優秀発表賞へのエントリーは、最先端の研究を競っている優秀な博士課程大学院生の証でもあり、エントリー数が少ないということは、そういうアクティブな若手が少ないことの反映なのではないかとも思えます。優秀な大学院生こそが将来を支えるものですので、ぜひ多くの若手のみなさんに来年はエントリーをお願いしたいと思います。また、指導教員のみなさんは、ご自分の指導する学生さんの後押しをしてあげていただきたいと思います。

最優秀研究者賞のセッションでは、2007年度最優秀研究者賞を受賞された生駒会員、2008年度に受賞された和田会員の受賞講演が行われました。生駒会員のスケールが大きいクリアな発表に聞き惚れ、また、まるでわが子の運動会のビデオを見せるように、ご自身のダスト衝突シミュレーションを紹介する和田会員の心温まる発表に、皆様も和んだことと思います。

最後に、多くの助言やご指南をいただいた、行事部会や情報部会のみなさま、昨年度の九州大学LOCの皆様、汗を流してくれたアルバイトの学生、少数ではありましたが(?)機能的に働いてくれたLOCメンバーにお礼を申し上げます。



最優秀研究者賞および発表賞の授賞式。左から、表彰状を渡そうとしている井田会長、最優秀発表者賞受賞者の瀧川晶さん(東京大学)、保井みなみさん(名古屋大学)、2008年度最優秀研究者賞受賞者の和田浩二さん(千葉工大)